

世代をつなぐ 地域活動者に聞く

地域活動の
魅力を伝える
情報誌

Vol.2
2016.3



東淀川区



西淀川区



阿倍野区



平野区

インタビュー

これからの
「参加のカタチ」
を見つけよう



城東区



都島区



東住吉区



読者のみなさまへ

この冊子は、大阪市社会福祉協議会が発行する広報誌「大阪の社会福祉」の連載コーナー

「世代をつなぐ地域活動者に聞く」の別冊報告書・第2弾です。

「地域活動はしていないけど、興味はある」という方、

地域活動に関わりながら「参加者も活動者もいつも同じで…」とお悩みの方、
さらにはそうした活動を支援する行政・社協職員の方などにご覧いただき、

地域での「新たな参加」「担い手育成」に向けて

次なる一歩を踏み出すための“ヒント集”として

ご活用いただければ幸いです。

CONTENTS

- 2 インタビューから迫る新たな参加のカタチ
- 3 世代をつなぐ地域活動者たち

地域を引っ張る！次世代のリーダー

- 5 城東区 東中浜地域 庄司 佳奈さん 第721(平成27年6月発行)号掲載
- 7 平野区 喜連北地域 室川 栄二さん 第727,728(平成27年12月,平成28年1月発行)号掲載

強みや経験を活かして地域でも活躍！

- 9 東住吉区 石野 隆さん 第723,724(平成27年8,9月発行)号掲載
- 山藤 圭二さん
- 11 都島区 鳥屋 利治さん 第725,726(平成27年10,11月発行)号掲載
- 13 西淀川区 野里地域 福田 留美さん 第729,730(平成28年2,3月発行)号掲載

若者、地域に一歩踏み出す

- 15 阿倍野区 竹田 有希さん 第720(平成27年5月発行)号掲載
- 17 東淀川区 小笠原一磨さん 第722(平成27年7月発行)号掲載

- 19 参加・参画を広げるためのヒント（甲南女子大学 人間科学部 准教授 鈴木大介さん）
- 20 「世代をつなぐ」連動企画レポート
- 21 社協ワーカーの視点



インタビューから迫る 新たな参加のカタチ

「世代をつなぐ地域活動者に聞く」は、地域活動の担い手の固定化・高齢化といった課題を背景として、平成26年4月にスタートしました。初年度は、比較的若手の地域活動者・10区13人にインタビューを重ね、その内容を冊子にまとめて発行。そこでは、自分の子どもに関する学校や地域での役（PTA、子ども会などの役員）を頼まれたことがきっかけで、徐々に地域のつながりや活動のおもしろさを体感していった、という方が多くを占めていました。

そこで2年目（平成27年度）は、そうした入口だけではない「参加のカタチ」を探るべく、より多彩な地域活動者にインタビューを実施。地域組織の中堅的な役割を務める次世代のリーダーをはじめ、さまざまなフィールドで培った強みや経験を活かして地元地域にも関わる方、さらには「地域活動をやってみたくて、まずは社協を訪ねた」という若者など、バラエティーに富んだ7区8人の「参加の入口」「活動スタイル」「地域への思い」に迫りました。

加えて、それぞれのインタビューから、新たな参加・担い手育成を活かせるエッセンスを抽出。インタビューページの最後に「ヒントはココにあり!」として鈴木大介先生にコメントをいただいています。これから、各区・地域での「新たな参加のカタチ」を創っていく手がかりとして、ご活用ください。



世代をつなぐ 地域活動者たち

今回、冊子で取り上げたのは7区8人の地域活動者たち。
さまざまな特徴をもつ8人を「次世代のリーダー」「強みや経験を活かした活動」「地域に一步踏み出した若者」という3つのカテゴリーに分けて紹介します。
「この人は、どんなきっかけで活動を始めたんだろう」「活動の魅力は？」——
詳しくはページをめくってインタビューコーナーへ！
どうぞ気になる方のお話からご覧ください。



地域を引っ張る！次世代のリーダー

地域組織に基盤を置きながら、これからの世代とベテラン活動者の調整役、
地域運営の要として、欠かせないポジションを務めています。

しょう じ か な
城東区 東中浜地域 **庄司 佳奈さん**

「校区アクションプランで地域の課題と向き合う」 **P.5**

むろ かわ えい じ
平野区 喜連北地域 **室川 栄二さん**

「体育会系！防災リーダー」 **P.7**

強みや

経験を活かして 地域でも活躍！

地元密着型の商店・NPO など、
それぞれのフィールドで培った強みや
経験から、地元地域や区内にも新たな
風をもたらしています。

東住吉区 山藤 圭二さん/石野 隆さん



「地域に溶け込む“まちの電気屋さん”」

P.9

都島区 鳥屋 利治さん



「障がい者の“普段の暮らし”を地域で伝える」

P.11

西淀川区 野里地域 福田 留美さん



「子育て支援NPO・地元地域での活動を両立」

P.13

若者、地域に一步踏み出す

「地域活動をしたい」と、自ら飛び込んだ2人。同世代の仲間たちとのネットワーク
づくりや、区域をフィールドとして地域を限定しない活動スタイルにも注目です。

阿倍野区 竹田 有希さん



「若手グループ“あべ若丸”として地域活動に接近」

P.15

東淀川区 小笠原 一磨さん



「花火をあげたい!を胸に…仲間と創る新たな活動」

P.17



城東区 東中浜地域

しょう じ か な
庄司 佳奈さん (47)

プロフィール

町会長、連合町会・地域活動協議会副総務、主任児童委員を務める。校下アクションプランプロジェクトチームリーダーとしても活躍中。
20歳の娘と中学1年生の息子の母親。

転居後のマンションで率先して町会を立ち上げ、校下アクションプランでも新たな活動を展開する庄司佳奈さんにうかがいました。

「気づいた課題を話し合って 自分たちで解決していきたい」

マンションで町会立ち上げに奔走

―地域活動に関わるきっかけは？

上の娘に心臓疾患があったことから「少数派の意見にも耳を傾けてほしい」「ハンディキャップのある・なしに関わらず子どもも親も交流できれば」との思いを持って、当時今の住まいとは別の校区でしたが、小学校のPTAに関わってきました。

娘が高学年になると、区のPTA副会長になり、市のPTA会議にも参加。他区の活動事例も聞きながら、いろいろなご縁で、新たなことを身につける機会をいただきました。

―その後、東中浜地域に引っ越されたのですか？

平成19年に現在の東中浜地域に移り、350所帯を越える大規模マンションに入居しました。わが家は第1期で入居しましたが、当時、このマンションは町会に入っていませんでした。

そこで、子どもたちが地域行事に参加したり、つながりをつくるには町会が必要だと感じ、実行委員を募り、当時の連合町会長にも相談し、立ち上げに着手しました。

―自ら率先して町会を立ち上げられたんですね。

班割りを決めたり、班長・副班長をどう選ぶかとか…ルールを決めたり、1軒ずつ説明に回ったりしたことを覚えています。1年がかりで立ち上げて、発足時から町会長をすることになりました。今では町会ができたことで、マンション内でも地域内でも、活発な交流につながっています。

子どもたちの時代に 問題を先送りしないように

―現在力を入れている活動は？

リーダーを務める校下アクションプランは、今一番おもしろいですね。地域の課題を見つけてきて、すぐに着手すべきか、もしくは3年、5年後を

見据えて何か手を打つべきかなどを話し合って、自分たちで計画を立てて取り組む。

最近では、高齢者の見守りと、そのための担い手づくりが課題であったことから「高齢者見守り隊の家」という活動を新たに立ち上げました。高齢者の見守りに協力するサポーターを呼びかけて、講座を開催。各サポーター宅には啓発用の旗を掲げています。

―アクションプランのリーダーとして心がけていることはありますか？

会議では「話をさえぎらない」ことを大切にして、存分に語ってもらっています。どんな意見も前向きに受け止めてくれる連合町会長の存在も大きいですね。あとは、事業の「持続性」についてどうすればいいか、ということも常に考えています。

私の地域活動履歴

平成16(2004)年	●娘の小学校のPTA役員になる
平成17(2005)年	●区のPTA副会長、はぐみネットコーディネーターになる(19年度まで)
平成18(2006)年	●大阪市PTA広報委員長になる
平成19(2007)年	●東中浜地域に転居し、町会立ち上げに着手 ●城東区ゆめ～まち～未来会議参加開始(現在に至る)
平成20(2008)年	●町会が立ち上がり、町会長になる
平成21(2009)年	●主任児童委員になる
平成22(2010)年	●校下アクションプランプロジェクトチームリーダーになる ●連合町会・地区社協の会計になる
平成24(2012)年	●連合町会・地域活動協議会の副総務になる



「高齢者見守り隊の家」を推進するみなさんと



二人三脚の大森連合町会長(左)とともに

一活動を通して、自身の意識に変化はありましたか？

普通に生活しているだけでは気づかなかったことに自然と目がいくようになりました。例えば、高齢者問題のニュースを見ていても「うちの地域ではどうだろう」「これから地域ではこんなことをしないとイケないな」と考えてしまうんです。

子どもたちの時代に苦勞を回さないように、気づいた人がやらなきゃいけない。一般市民としてできる範囲は限られているけど、今はたまたま町会長をやっているの、何かできることがあるかもしれない。

数年後、問題が深刻になったとき、子どもに「お母さん、そのとき何してたん？」と言われなように…チャンスと思って自分の立場でできること

をやっていきたいです。

お願いするときは 具体的な形を提示する

一地域活動への参加を広げるために大切なことは？

単に「地域の活動を手伝ってほしい」というと広く感じてなかなか入ってくれないことがあります。なので、例えば「この資料つくるの手伝って」と、具体的な形を提示してお願いすることですね。そうすると案外引き受けてくださるものです。そんな中での何気ないコミュニケーションから、その人の興味・関心や、協力してもらえそうなことを推し量ります。

得意なことならすすんでやりたいという人も多いのではないのでしょうか。「これならできる」「これが得意」

という情報を集めた人材バンクのような仕組みが、地域でできるとおもしろいかもしれないですね。

一ありがとうございました。

[取材:平成27年5月14日]



ヒントはココにあり！

思いの共有、 アイデア創出を促す リーダーシップ

地域の中で少数の立場にある方々への想い、それが活動の出発点となっています。普通に生活していると気づかない問題への対応を意識されていることは、地域の支えあいから、こぼれ落ちる人をより少なくするうえでとても素晴らしいことといえます。また会議においては「話をささげらない」「存分に語ってもらう」といった姿勢を心がけておられます。「誰もが」気兼ねなく声を出し、声を聞くことができるための配慮は、個々の持つ思いを遮らず、活発な議論や活動を進めていくうえで大切になってきます。特に若年層にとってはそれを意識されているリーダーがいることは非常に心強いことでしょう。(鈴木大介)



町会立ち上げ当時の様子を語る庄司さん



区社協の井西さん(右から2人目)を交えて



平野区 喜連北地域

む ろ か わ

え い じ

室川 栄二さん(47)

プロフィール

喜連北連合町会副会長、防災リーダー隊の隊長。

平野区区政会議委員も務める。

高校3年生の息子と中学3年生の娘の父親。

地域の防災活動・スポーツ活動でおよそ10年に渡り活動してきた室川栄二さんにうかがいました。

「地域活動は大変だけど 自分が大きく変わるチャンス」

「体育会系」の防災チーム

—地域活動のきっかけは？

税務関係の仕事をしているのですが、息子の小学校入学式(平成17年)で、納税協会の会議で同席したこのある顔見知りの男性がいました。その方に「わし連合町会長やねん」と声をかけられ、次の日には「防災リーダーやって」「ここに名前と年齢、身長、体重書いて」と言われたのがきっかけです(笑)。

同時に、私自身長く野球をしていたことから、PTAのソフトボール部の入部をきっかけに、子ども会の連合ソフトボール部のコーチ、後に監督として、子どもたちの指導をするようになりました。そこからスポーツ活動を通して、地域の方々と交流を深めてきました。

—現在は、防災リーダー隊の隊長をされているんですね。

平成22年、先輩である前隊長が

転勤することになり、「単身赴任で名古屋に行くから、お前が引き継いでやれ」と言われました。

私がソフトボールの指導をする同じブランドで、前隊長はキックベースを教えていました。そのときのつながりもあって、前隊長の言うことは、何でもハイって従うし、後輩も私に対してはそんな感じですね(笑)。

—喜連北地域の防災リーダーの特徴や活動について教えてください。

喜連北の防災リーダーは、スポーツをやってきた人間が多く集まるから、体育会系の雰囲気というか、いい意味で、みんなサバサバしているし、とにかくよく動きます。

災害はいつやってくるかわかりません。防災リーダーの男性たちは、みんな昼間に働いているから、女性部のメンバーにも防災広場(=地域内の公園)のことや、避難所の立ち上げ方などを情報共有しています。

—ご自身の防災意識にも影響はありますか？

1週間分の非常食の備蓄、非常持ち出し品の用意など、わが家でももちろん実践しています。

ニュースを見ていると、災害救助の様子が気になりますし、自分もボランティアとして飛んでいきたい気持ちになります。

各団体の長が動きやすいように

—そのほかに地域に関わった活動で印象に残っていることはありますか。

子ども会とPTAが一緒になって夏休みに「子どもフェスティバル」を開催したことです。企画・運営をPTAと一緒にすることで、子ども会の加入・未加入にかかわらず、学校全体の子どもたちが楽しめる場をつくることができました。

また、暑い昼間ではなく「夜にやりたい」という子ども会会長の思いを聞き、私もその実現に向けて協力し

私の地域活動履歴

平成17(2005)年	●防災リーダー隊 入隊
平成20(2008)年	●防災リーダー隊 副隊長になる
平成22(2010)年	●防災リーダー隊 隊長になる(前隊長が名古屋に単身赴任のため)
	●喜連北連合振興町会 副会長になる
平成25(2013)年	●平野区 区政会議委員になる



防災訓練には子どもたちも参加



体力自慢の体育会系が揃う防災チーム

ました。夜の開催は、今回で2回目。花火や手品を取り入れたり、非日常を味わえるイベントになっています。

これからは、子ども会の活動に、忙しい父母に代わって、祖父母世代に加わってもらうのもおもしろいかもしれませんね。

一室川さんにとっての地域活動のやりがいや魅力は?

この地域で生まれ育ったわけでもなく、縁もゆかりもなかったこの地域で、今こうして多くの方々とつながりを持てているのは地域活動のおかげです。

特に、スポーツを通して地域との交流にやりがいを感じますね。ふりかえてみると、私自身、学生時代からスポーツを通して人間関係を学び、変わってきたように思います。

現連合町会長は、平日仕事をして

いる私をいろいろとフォローしていただきながら「あんたに任してるから!」と背中を押してくださるのもうれしいです。同じように自分も、各団体の長がやりやすいように立ち回れたらと意識しています。

地域活動は大変…とよく思われるけど、関わる自分自身が「大きく変わる」チャンスだと思います。

—ありがとうございました。

[取材:平成27年9月27日]

初めは「自分のため」「わが子のため」でもいい

—最後に地域活動に関わる人・関心がある人へのメッセージをお願いします。

多くの人にとって活動の出発点は、やはり「自分の子どものため」か「自分のため」ではないでしょうか。

初めから「人のため」ということだけで一步踏み出すのは正直難しい。けれど、入ってしまえば何のことはないんです。大人同士の付き合いでつながりができるし、子どもの喜ぶ顔も見られる。



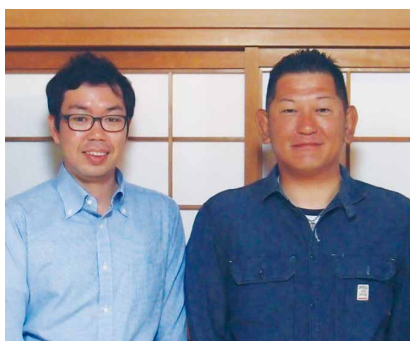
ヒントはココにあり!

活動の入口は、身近なこと・気軽な気持ちから

地域活動への入口は、いろいろなところで開いています。室川さんは日常のフットした場面で、地域活動をされている方と知り合い、活動に足を踏み入れられました。またご自身の経験からスポーツ活動に対する造詣があり、人間関係の中で育まれる青少年の成長について深い認識を持たれています。その経験を活かして魅力的な企画を考え、それをベテラン勢がフォローしてくださる。その関係性は頼もしい一言に尽きるでしょう。また活動を始めるにあたっては、「自分の周りの身近な人たちへの思い」から始めて構わない、身近だからこそ足を踏み入れやすいという重要な示唆をくださっています。(鈴木大介)



地域活動の魅力を語る室川さん



区社協の阪井さんを交えて



東住吉区

いしの たかし
石野 隆さん [いしのでんき](右)

さんとう けいじ
山藤 圭二さん [山藤電機商会](左)

プロフィール

ともに大阪府電機商業組合東住吉支部に所属し、電気店を経営。東住吉区社協とともに「地元事業者との連携による見守りネットワーク構築プロジェクト」を推進している。

東住吉区内で電気店を営み、区社協との協働により地域貢献活動に取り組む石野隆さん、山藤圭二さんにうかがいました。

「知り合うきっかけをつくり、 輪を広げよう」

「まちの電気屋」として 高齢者の見守りに貢献

一はじめに「見守りネットワーク構築プロジェクト」のきっかけをおしえてください。

石野 元々電気屋として地域に何ができるかと考えていたところ、区社協の方が飛び込みでお店を訪ねてきて意気投合。私たちが所属する組合の東住吉支部でも、支部長を中心に「高齢者の見守り活動をすすめたい」という考えがあり、その構想が形になりました。

山藤 プロジェクトの話は、支部長から聞いて参加しました。最初は仕事が増えたというか、実は正直あまり気乗りしなかったんです。僕は「楽しかったらやる」と思う方なので(笑)。

一プロジェクトの具体的な取り組みをおしえてください。

石野 まちの電気屋は、ご自宅に訪問して電気周りのことを見ます。その強みを活かして、各地域の高齢者食

事サービスの後に「電気の安心安全セミナー」を開き、希望する高齢者宅に訪問し、無料点検をおこなっています。訪問点検では、電気配線が古くなっていたり、ほこりが溜まっていたりと危険な状態のまま使っているケースもありました。

山藤 活動は今年で3年目。それまでは、食事サービスもふれあい喫茶も知りませんでした。今ではボランティアさんとも顔なじみになり、自然と言葉を交わすようになりました。

楽しくなければ長続きしない!

一活動していてよかったことは?

石野 よかったことは、活動を通して地域の人たちと顔見知りになれたことです。地域の方はとても温かく迎えてくれました。また、認知症の疑いが見受けられる方がいたときは、区社協にも相談して、ゆるやかな見守り活動ができるよう心がけています。

山藤 みなさんに喜んでもらいたい

し、難しい話だけでは…と思い、2回目からは着ぐるみで登場したりと、自分自身楽しんでいきます。こういう活動は、楽しくなければ長続きしないですよ。

また、このようなセミナーを開くにも、電気屋単独であれば、単なる営業活動と思われるかもしれませんが、やはり区社協のコーディネートがあるということは大きかったです。

一電気店としてのプロジェクト以外にも活躍の場を広げられているそうですね。

山藤 矢田駅前商店街の若手5人で青年部として、物産展などを企画しています。そのことを短大生の前で話したのですが、学生同士のディスカッションでは思いもよらないアイデアが出て、若い人も地域に関心があるんだなあと感じました。

石野 私は、東住吉区ボランティア・市民活動センターに開設準備から関

私たちの地域活動履歴

- 平成25(2013)年 ●「地元事業者との連携による見守りネットワーク構築プロジェクト」開始
- 平成26(2014)年 ●石野さん:「東住吉区ボランティア・市民活動センター」の開設準備に関わり、運営委員長に就任
●山藤さん:矢田駅前商店街青年部が発足し、活動を始める
- 平成27(2015)年 ●プロジェクトは3年目を迎えて継続中



電気の話をつきつきながら



プロジェクトの実現を支えた電機商業組合東住吉支部の柳本支部長(左)と石野さん(右)

わり、今は運営委員長を務めています。また、平成27年2月に区社協が開催した、地域課題を話し合うワークショップに2人とも参加しましたが、新鮮な体験でしたね。

住まいは区外でも気持ちは「住民」

ワークショップでは、どんなことを感じましたか?

山藤 地域活動＝町会の役員さんというイメージでしたが、同じテーブルに登下校の見守り隊や保護司さんなどがいて「地域はこういった方たちに守られているんだ」と感動しました。聞いたことがあっても漠然としか知らなかったんです。地道な活動を知ってもらいたいし、もっとアピールできればと感じました。

石野 2人とも住まいは区外ですが、東住吉区で働き、地域と関わるなかで「この住民だ」という意識があ

ります。住んでいる地域で長く活動している人も、新しく入ってきた人も含めて、地域に関わる人同士が知り合うこと、そのきっかけを増やすことが大切ですね。

ボランティア・市民活動センターも同じことで、それぞれが持つ場や関係を広げることで、小さな輪が、やがて大きな輪になると考えています。

ー「知り合う」というのが一つのキーワードですね。

山藤 そうですね。知っている人がいるからこそ「私も参加したい」とか「何かしたい」と思うものです。

石野 地域に溶け込み、すんなりと入っていける区社協が、その輪を広げていくことで、地域活動はもっと盛り上がるのではないのでしょうか。

ーありがとうございました。

[取材:平成27年7月17日]



着ぐるみ姿の写真を手に「楽しむ秘訣」を語る



ヒントはココにあり!

**働く人・通う人が
“地域愛”を発露
できる場をつくる**

電気店という業種が持つ強みを活かしているところに大きなポイントが見て取れます。近年、地元企業と協定を結んで地域活動を協働で進めていく場面が多く見られます。見守り活動がその代表例でしょう。石野さん・山藤さんの活動では、柔軟な発想で「協働」を生み出し、地域住民の福祉課題・生活課題を見据えた対応がなされています。また企業の方々の関わりは、地域に「通う」方々の活躍の場を見つける機会となります。住んでいる人だけが地域に愛着を持っているわけではありません。通い、働く方々も愛着を持っています。その思いの発露の形として1つのモデルを示してくださっています。(鈴木大介)



社協と電気屋さんのコラボはこれからも続く



都島区

と や と し は る
鳥屋 利治さん (47)

プロフィール

NPO法人あるる代表理事。
あるるは、自立生活センター(区障がい者相談支援センター)、ヘルパー派遣、作業所の3事業を中心に展開。中野まちづくり協議会の構成団体にもなっている。

障がい者支援のNPO法人「あるる」の代表であり、地域に根ざした活動を展開する鳥屋利治さんにうかがいました。

「豊かな暮らしとは、 人との関わりをたくさんもつこと」

人は誰でも その人なりの歩みでいい

一はじめに、鳥屋さん自身のこれまでのことを教えてください。

私は生まれたときから脳性まひのために手足を動かすのに不自由があり、今は電動車いすで生活しています。「小さいときから、みんなと一緒に」という親の思いがあり、小学校から高校まで、養護学校ではなく地域の学校に通いました。

転機は20歳のとき、四肢麻痺の障がい者の「ツインバスケットボール」というスポーツに参加したことです。それまでは健常者中心の世界で生きてきましたが、頸髄損傷などの重度な障がいがある仲間と出会い、そこで自分自身の障がいとも向き合うことになり、これまで自分は健常者の世界にただ必死に合わせる生き方をしていたことに気づきました。

人は10人いれば10通りの生き方があってよい。人は誰でもその人なりの歩幅で歩んでいけばいいんだと考

えるようになり、障がい当事者運動の世界にのめり込んでいきました。介助制度の改善を求める活動や、「みんなで街に出よう」と車いすで外出し、アクセス調査などをしました。

一方、大学に通いながら、障がい者の職業訓練校でコンピュータプログラマーの勉強をして、一般企業のシステム部に入社。18年間、サラリーマンとして勤めながら、障がい当事者運動も続けてきました。

一代表を務める「あるる」はどんな団体ですか。

あるるは、障がいのある人が、地域で自立生活すること、自分らしく生きていくことを応援しています。平成13年、障がいのある仲間が立ち上げ、現在の都島区中野町に事務所を構えたのが平成18年。私が合流したのは会社を辞めた平成21年です。

地域での「普通の暮らし」を知ってほしい

一「あるる」の地域との接点についておしえてください。

ちょうど、あるるの3軒隣に中野地域の福祉会館があります。町会長会議で障がいのことを話したり、まちづくり協議会の活動にも声をかけていただいたり、ここ2~3年、特に地域との接点が大きくなりました。

一地域における啓発の取組みや、学校での福祉教育に取り組まれているそうですね。

都島区社協の方たちとともに、地域の方々に向けて「障がい者理解促進プログラム」として、それぞれ区内9地域を3つに分けて、身近な地域の会館で、昨年度は私自身の車いすでの生活についてお話をしました。

また、障がい当事者である「あるる」のメンバーと、小中学校に出向いて福祉教育のお手伝いや、交流をすることもあります。

私の地域活動履歴

～昭和61(1986)年	●車いすで小・中・高校と地域の学校で障がいのない生徒たちとともに学ぶ
平成12(2000)年	●大阪頸髄損傷者連絡会の事務局長をその後13年間続け、障がい当事者運動を知る
平成21(2009)年	●JR阪和線杉本町駅バリアフリー改善運動に参加
平成23(2011)年	●NPO法人あるる代表理事になる
平成24(2012)年	●都島区障がい者相談支援センターを受託する
平成26(2014)年	●地域の障がい者支援団体として、地域福祉研修会や地域の学校への福祉教育などに取り組み、まちづくり協議会の構成団体となる



学校に出向いての福祉教育

一どんな反応がありますか?

こういった場で話をすると「車いすに乗っている人が、地域でこんな風に生活していることがわかった」「障がいのある人もみんなと同じように生活を楽しんでるんだ」といった感想もいただきます。

「こんなことを聞いたら、悪いかな」と思うかもしれないけど、遠慮なく質問してほしいし、答えていきたい。もっと関わりをたくさんもって、普段の暮らしを知ってほしい、そんな思いで話をしています。

多様性を受け止められる豊かな社会へ

一鳥屋さんが考える、地域とつながることの大切さは?

地域活動の魅力は、顔見知りや知り合いが増え、「ひとりで生きている



おまつりを通して多世代と交流



目的や対象に応じて他のスピーカーと同行

んじゃないんだ」と思えることだと思います。身近な地域で、声をかけ合える、いろいろなことを教えてもらえる。その中で「この地域で暮らしているんだ」と実感することができます。

私たちの自立とは、一人で何でもできるというのではなく、いろいろな人と関わりながら生きていくということです。私自身、1ヶ月に10数名ものヘルパーさんの手を借りて暮らしていますが、人との関わりをたくさんもつことが豊かな生活につながっていくことだと考えています。

障がいがあっても、分けられることなく地域の中で生きていける社会にしていきたい。どんな人でも認められる、多様性を受け止められる社会こそが豊かな社会ではないでしょうか。

「たとえ障がいをもつことになった

としても地域で生きていけるやん」
一そんな風に思える地域社会をつ
くってみたいです。

一ありがとうございました。

[取材:平成27年7月30日]



ヒントはココにあり!

互いを知ることから、地域とNPOが新たな関係を築く

元々の団体の特性として、福祉課題を持つ方々への生活支援や地域福祉への深い造詣を有しておられます。鳥屋さんの取り組みのすばらしいところは、そのような専門性を持つ人材として地域と良好なつながりを持ち得ているという点です。ご自身の地域会館での講演活動だけでなく、小・中学校での福祉教育のお手伝いなど、積極的に地域の方々との接点を設け、地域とNPOの「相互理解」の機会とされています。お互いのことを知ることから始める関係づくり。当事者にとっても既存の活動者にとってもプラスになる関係性がそこには見て取れることでしょう。(鈴木大介)



あるるの「自立体験室」にて



西淀川区 野里地域

ふく だ る み
福田 留美さん (47)

プロフィール

子育て支援のNPO法人「にしよど にこネット」副代表理事・事務局長。野里地域主任児童委員、はぐくみネットコーディネーターを務める。
20歳の息子と17歳の娘の母親。

子育て支援のNPO法人副代表理事であり、地域では主任児童委員として活躍中の福田留美さんにうかがいました。

「ちょっとした仕掛けで、 人は人とつながることができる」

この人と一緒に やってみようかな

一はじめに、福田さん自身のこれまでについておしえてください。

息子が2才のとき、子育てサークル「おててつないで」に入りました。当時は子どもを連れて気軽に行ける室内の遊び場が少なく、興味を持ちました。

入ってから4年目、もうそろそろ私の番かな…という空気を感じたのと、ちょうど「この人と一緒にやってみようかな」という仲間もいたので、グループリーダーになりました。ここから、私の子育て支援の活動が始まり、後のNPO法人化にもつながっていきます。

—その後の活動は?

そんな活動をしていたせいか、子どもが小学校2年生のときに、いきなりPTA学級委員に指名され、気づいたら副会長になっていました。子育て支援と地元の野里地域、両方で活動して

いると「今日は何の役できているの?」と声をかけられることもありました。

NPOに専念した期間もありましたが、2年前には主任児童委員に任命いただき、子育てサロンのほか、登下校の見守りなどをしています。新米ですが、これまでの経験を活かし、得意の“お願い上手”で活動しています。

人の得意なことを 見つけるのが得意

—「お願い上手」のポイントは?

その人ができる、ちょっとしたことから関わりを持っていただき、巻き込むことです。例えば「校正が得意」「大工仕事ができる」とか。私、人の得意なことを見つけるのが得意なんです(笑)。得意なことをみんながちょっとずつ出し合えれば、無理なく活動が続けていけるのではないのでしょうか。

「ちょっとお願い」と頼んでいると、気づけば自分も「ちょっとお願い」と頼

まれる側になっていて…ときには「全然ちょっとじゃないやん!」と思いながらも、活動を楽しんでいます。

—副代表理事を務める「にしよど にこネット」はどんな団体ですか?

一番の目的は、孤立しない子育て環境をつくること。そのために、子育てサークルのサポートや担い手育成、子育て施設の運営などをおこなっています。子育てに行き詰ってもう限界…そんなときに着飾らずに来れる、駆け込み寺のような場所でありたいです。

妊婦さん・赤ちゃん親子と学校に向く「いのちのふれ合い授業」にも力を入れています。特に中高生には命の尊さを感じてもらって、子どもを産むことへのリアリティを持ってもらいたいんです。

将来、親になったときに地域には子育てを支えてくれる人や場所があることを思い出してもらえたらうれしいですね。

私の地域活動履歴

平成 9 (1997) 年	●子育てサークルに参加
平成 12 (2000) 年	●子育てサークルのリーダーになる ●区在宅サービスセンターで「乳幼児ひろば事業」を始める
平成 15 (2003) 年	●小学校のPTA学級委員になる
平成 19 (2007) 年	●小学校で児童と妊婦さんの交流「いのちのふれ合い授業」を開催(以降、毎年開催する)
平成 20 (2008) 年	●NPO法人にしよど にこネット副代表理事・事務局長になる ●大阪市つどいの広場事業「にっこりRoom」を開設する
平成 21 (2009) 年	●小学校のPTA副会長になる ●小学校創立90周年式典に実行委員会メンバーとして関わる
平成 24 (2012) 年	●地域の子育てサロンで「子育て講座コモンセンスペアレンティング」を開催
平成 25 (2013) 年	●地域の主任児童委員になる
平成 27 (2015) 年	●地域のはぐみネットコーディネーターになる ●小学校で「子育て講座コモンセンスペアレンティング」を開催



野里小学校2年生「いのちのふれ合い授業」



野里小学校はぐみネット主催「子育て講座コモンセンスペアレンティング」

みんなが笑顔で楽しそうなところを見るのが大好き

一福田さんにとっての活動の魅力は?

私、みんなが笑顔で楽しそうにしているところを見るのが大好きなんです。

平成27年12月に西淀川区ボランティア・市民活動センターで開催した「交流カフェふくふく」では、赤ちゃんからシニアの方、車いすの方がテーブルを囲んで交流されている光景に感動しました。

人はそれぞれ、ちょっとしたきっかけ・仕掛けがあれば、人と関わる力をもっているんだと思います。

一地域活動への参加を広げるために大切なことは?

まずは参加してくれた人に感謝して温かく迎えること。そこから、その場にいる人同士がつながるきっかけをつくることを意識しています。

そして、その人の魅力や特技、一緒にできそうなことを見つけてお願いしています。

自分たちがいきいきと楽しむことで「私も入ってみたいなあ」と思う人が増えたらうれしいですね。

私自身、地域や周りの方々から子育てのサポートがあったからこそ、子どもの育ちを楽しめる余裕ができたと感じています。顔の見えるつながりを増やして、「ちょっと助けて」「いいよ」

「ありがとう」と支えあえる、そんな地域をめざしたいです。

一ありがとうございました。

[取材:平成28年1月6日]



ヒントはココにあり!

仲間への感謝、温かい関係で一人ひとりの力を引き出す

「お願い上手」——素敵な言葉ですね。福田さんがリーダーを担われたときもそうですが、仲間の力、周りの方々の力をとても大切にされています。一人ひとりの力を信じて活動へと紡ぎあげていく。そのためつながりや仕掛け、そして笑顔のすばらしさがインタビューの中でもひしひしと感じられます。誰もが無理なく楽しく活動ができるように、その持っているちょっとした魅力や特技を活かせる機会をつくる、その工夫を意識されています。また、地域活動とご自身が所属されるNPO活動で得た知見を、双方にうまく還元させているところもおもしろいです。何より仲間に対する感謝の気持ちがすばらしいです。

(鈴木大介)



「にっこりRoom」0才親子交流日の様子



区社協との縁にも歴史あり(左:佐藤さん/右:西川さん)



阿倍野区

たけだ ゆき
竹田 有希さん (31)

プロフィール

阿倍野区を盛り上げる若手ボランティアグループ「あべ若丸」の副代表、広報担当。
他市の行政職員として勤めながら、勤務先の地域でもボランティアとして関わる。

住民主体の地域づくりに関心を持ち、自ら地域活動に飛び込んだ竹田有希さんにうかがいました。

「地域活動の先輩方と 若い世代をつないでいきたい！」

海外体験から「地域」に着目

一地域活動に関心を抱いたきっかけは？

大学を卒業後、空港の窓口で働いていましたが、以前から国際協力に関心があったことから、ブータンに一人旅に出かけました。現地では、経済的には貧しい中でもみんな「幸せだ」と言います。逆に「日本はどう？」と聞かれ、日本社会の問題に目を向けるきっかけになりました。

実際、どんな社会にしたいかを考える中で、一人ひとりが声を出しやすい地域社会の大切さに気づき「住民主体の地域コミュニティづくり」を研究するため、仕事を辞めて、大学院に入ることにしました。

自分自身も地域と関わりたいと思い、民生委員をしている母のすすめで阿倍野区社協をたずね、アクションプランの活動を紹介してもらいました。

一参加してみてどうでしたか？

私が参加したのは、愛犬家のマナーや見守り・防犯意識の向上をめざす「わんわんパトロール」を推進する「きれいなまちづくりチーム」。入ってみると「来てくれてうれしい」「次もぜひ来て!」と歓迎してもらえて、まるでわが子のように接してくれる人もいたり、とてもうれしい体験がありました。

また、アクションプランの会議では、みなさんの地域への思いや知識・経験の豊富さを目の当たりにして、ただただ、すごいなと感じました。

若手グループ「あべ若丸」との出会い

一その後の活動は？

アクションプランから地域との接点ができたものの「若い人がほとんどいない」と感じていました。そんな中、区役所から阿倍野区を盛り上げる若手ボランティアグループ「あべ若丸」にお誘いをいただき「絶対入りま

す」と即答。メンバーは、私のように地域に関心がある若者もいれば、イベント企画に長けた人や飲食店の経営者もいます。近い年代で一緒に活動できる仲間ができたのは何よりうれしかったです。

一あべ若丸の活動で心がけていることは？

私が意識しているのは、日頃から地域活動をされている先輩方と、地域への思いや強みを持つ「あべ若丸」のような若い世代をつないでいくことです。

各地域で活動する方々とあべ若丸の交流会では「クイズ大会」を企画しました。あべ若丸メンバーも地域に目を向ける機会になればと、区内10地域に関する問題1問ずつを含むあべのにまつわるクイズを出題。大変盛り上がり、「年代や活動の範囲は違っても、阿倍野のことが大好きなんはみんな一緒やねんな」と実感しました。

また「あべ若丸」として、区内のお

私の地域活動履歴

平成23(2011)年	●阿倍野区地域福祉行動計画(アクションプラン)きれいなまちづくりチームに参加するようになる
	●阿倍野区愛♡博覧会の企画と当日運営のお手伝いをする
平成25(2013)年	●あべ若丸のメンバーになる
平成26(2014)年	●あべ若丸のメンバーとして地域イベントのお手伝いをするようになる(あべのカーニバル、あべのつながりフェスタ、小学生相撲大会、アベテンパル、どっぴり昭和町、帝塚山まつり、晴明丘さくら祭り等)
	●あべ若丸副代表になる



若者企画が新たに阿部野を盛り上げる



あべ若丸メンバーとともに

祭りや行事への出張参加もしています。メンバーは、バルを運営している人がいたり、さまざまな強みをもっています。そういった発想や企画力を地域とうまく結び付けられたらと考えています。

地域でつながる魅力を 同年代に伝えたい

一地域活動の魅力は？

多様な年代・価値観の人たちと出会える、それによって自分の幅が広がることですね。私が地域活動で感じたうれしい出来事を、どうすれば同世代にも伝えられるか…というのが今の自分の課題です(笑)。

一若い世代の参加をすすめるために大切なことは？

まず、若い人が「おもしろい」「参加したい」と思えるような工夫が必要です。また、全面的な関わり方だけでなく、スポット的な関わりをすすめることや、誰でもオープンに参加できる井戸端会議的な場もすごく重要だと思います。

それと、行事に参加しても、連合や町会ごとに集まる場面があると、そこに住んでいない在勤・在学の人、居場所がないと感じるかもしれません。あべ若丸には区内に住んでいない人もいるし、私自身、勤務先(他市)の地域でも活動しています。これからは、在勤・在学の人と一緒に地域活動に参加しやすいような仕掛けや配慮も大切ではないでしょうか。

一ありがとうございました。

[取材:平成27年4月18日]



ヒントはココにあり!

新たな層とつながる 機会づくりに一工夫

「アクションプラン」や、若手ボランティアグループ「あべ若丸」など、地域活動のさまざまな入口を経験されています。そこでのねばり強いご自身の経験もさることながら、若者と地域活動をおこなう方々との「つながりづくり」の重要性を示唆していただいています。柔軟で、持続可能な支えあいのまちづくりをすすめるには、両者(新たな主体と既存の活動団体)が価値観や行動形態について知り合うことがまず大切になってきます。また在勤・在学といった住民ではない昼間人口層への配慮についても重要です。そういった方々とのつながりや居場所の創出をいかにおこなうか、工夫の見せ所でしょう。(鈴木大介)



地域とあべ若丸の交流会



大学院での研究と活動の実体験を重ねて



東淀川区

お が さ わ ら か ず ま

小笠原 一磨さん (30)

プロフィール

東淀川区ユースリーダー代表（インタビュー当時）として、東淀川区 Music Festivalや、地域清掃、商店街との協働企画などを展開。IT関連会社「株式会社サムライブラン」代表取締役。

仲間内の遊びの延長でボランティア活動と出会い、東淀川区をフィールドに若い力を活かしたさまざまな地域イベントを展開する小笠原一磨さんにうかがいました。

「思いある若者には ぜひ一度、挑戦の機会を！」

「水都祭を復活させたい！」 が原動力

一地域活動を始めたきっかけは？

20代前半の頃、中学時代からの友人たちとよく遊んでいて、「何か大きいことしたいな」という話になり「水都祭（地元の花火大会）を復活させよう」と盛り上がったんです。河川事務所などにかけ合いましたが話は進まず…僕たちには何の信用もないし、地域のことも知らなかった。

そこで、地域でボランティア活動と思い立ち、「東淀川区 ボランティア」とインターネットで検索して、「東淀川区ボランティア・ビューロー」を発見。そこで紹介された「東淀川区ユースリーダー」に加わったのが、僕のボランティア人生の始まりです。

ユースリーダーに入ってみると、年間活動はあったものの「もっと展開できるんじゃないか」という思いもあり、入って2年目に自ら代表を引き受けました。

一代表になってからの活動について おしえてください。

いきなり花火はできないので（笑）まずは若者の音楽イベントをしたいとユースリーダー組織の基盤である青少年指導員の会議で提案しました。

当初の反応は厳しいものでしたが、少数でも応援者ができたらという思いで投げかけ、徐々に協力もいただきながら実現に向けて動き出しました。

「どこに依頼していつまでに返事をもらって」「この件はあの人に声をかけて」と調整役として立ち回るのは想像以上に変なでした。その分、成功した後の充実感も大きく、「地域活動って意外とおもしろいやん」と実感しましたね。

同時に「次いつするんや？」と声をかけてもらえるなど、風向きの変化もありました。真剣にやったからこそ、信頼してもらえたんだと思います。

遊びも地域活動も “楽しんでもらう” 精神は同じ

一以降の活動の広がりとは？

音楽イベント「東淀川区 Music Festival」は、その後、第2回、3回と、スポンサー開拓や野外開催など、新たな要素を加えながら続けています。いろいろな人が関わって一つのものをつくる。イベントは「形に残らないものづくり」だなと感じています。

他にも「ボランティアと言えばごみ拾い」ということで、月1回ペースでこれまで20回ほど清掃活動を続けています。東淀川区内で志をもって活動する若い世代の人たちをネットで募って、多いときには25人ぐらいで活動しています。

そうした出会いから、商店街との協働イベントにもつながりました。これもネット経由で、奈良県から小学校6年生の男の子が落語をしに来てくれたりと盛り上がりましたね。

私の地域活動履歴

平成21(2009)年	●東淀川区ユースリーダーに参加
平成22(2010)年	●東淀川区ユースリーダー代表に就任
平成23(2011)年	●第1回 東淀川区Music Festival開催 [11/19]
平成24(2012)年	●ごみ拾い(地域清掃)を定期活動として始める
平成25(2013)年	●第2回 東淀川区Music Festival開催 [3/24]
平成26(2014)年	●小松商店街 物産展&プリマ参加(協力:東淀川区でなんかする会) [12/20]
平成27(2015)年	●みんなで!東淀川フェスティバル(旧東淀川区Music Festival)開催 [2/14]

一 小笠原さんにとって地域活動の魅力は?

人とのふれあいですね。誰かに感謝されたり、頼られたりすることを実感すると「次もがんばるぞ」「またこの人たちに頼りたい、喜んでもらいたい」という気持ちになります。

仲間内の遊びも地域活動も、「来てくれた人に楽しんでもらおう」という精神は同じです。

本業も活かして地域の情報発信に貢献

一 地域活動と仕事とのつながりは?

元々会社勤めをしていましたが、その経験は、地域活動での企画書作成やプレゼンで活かしました。一方、活動するうちに「地元東淀川に貢献したい」という気持ちが強くなり、平成26年の秋に区内で起業しました。そこで取り扱うデジタルサイネージ(電子看板)やホームページ・動画制作などで、地域の活性化・情報発信に貢献できないかと模索中です。

一 若い人の地域活動への参加をすすめるために大切なことは?

「ボランティア大募集」というよりは「気軽にどうぞ」という感じで、一度参加していいなと思った人が続けてく



愛と tong で地元をおそうじ

れるといいですね。

地域でこんなことをしたい、という若者には、ぜひ一度挑戦の場を与えてあげてほしいです。若者のメンタルはそんなに強くないので、否定されるとへこみます(笑)。

それと、インターネットの力はずっと活用できるはず。地域に住む人に限らず、地域に興味がある人も広く呼び寄せられる可能性があるのではないのでしょうか。

一 ありがとうございます。

[取材:平成27年6月19日]

【後日談】

「花火をあげたい——」取材から3か月後の平成27年9月、その思いをカタチに変えた小笠原さん。夏の夜空に彩り豊かな大輪が打ち上げられ、訪れた多くの人の心に新たな思い出を刻みました。夢への一步を踏み出した小笠原さんの次なる目標とは——。東淀川区から目が離せません。



グッと響く呼びかけ方は若者流



ヒントはココにあり!

地域に目を向けた若者には度量をもって見守る

内に持つ「地元愛」からまずはアクションを起こそうとしたその行動力、そこが何より素晴らしいです。結果的には自身に信用が足りなかった、地域のことを知らなかったという気づきにつながっていくのですが、その経験を糧にして、愛着ある東淀川へのさまざまなアイデア創出へとつなげています。また若者のメンタル面についても、非常に大きな示唆をくださっています。地域活動では出る杭を叩いても仕方ありません。特に地域に目を向けて発奮しようとしている若者に対してはなおのことです。既存の活動者にはご自身の経験の蓄積を踏まえつつ、見守り支える度量というものも求められてくるのでしょうか。(鈴木大介)



区内の有志で打ち上げた65発の花火が夜空を彩った



参加・参画を広げるためのヒント

7区8人の地域活動者の語りからみえてきた、若手を中心とした新たな参加・参画を広げるヒントとは——本企画に平成26年度から関わり、地域活動の参加・参画を促す要因に関する調査研究に取り組む鈴木大介先生にうかがいました。

各インタビューページの「ヒントはココにあり」（同先生による執筆）とあわせてご覧ください。

今回、本冊子に登場された方々は、地域活動に参加しているという共通項を持ちながらも、その所属は地域活動協議会や各種地域団体の役員、ボランティア団体やNPOに民間企業とバラエティに富んでいます。そのインタビューの中から、若年層が地域活動に参加していくうえであらためて大切だと考えられるポイントを、前回冊子の考察結果を踏まえ、4点にまとめました。

1. 個々が持つ強みや興味を活かす活動場面の重要性

趣味や経験、問題意識や興味関心、そして仕事柄身につけた知識やスキル。人はそれぞれ多彩な魅力を持っています。特に地域の若年層の中には、柔軟な発想や企画力を持つ人が多いです。その多彩な魅力を既存の活動に結びつけるほか、魅力にあわせた取組みを考えることで柔軟な活動がおこなわれていました。地域活動に携わるきっかけや入口は、身近なところでつくっていくこともできるのです。また企業やNPOの方の中には、本来業務と両立させて、プラスの波及効果をもたらしながら、地域活動の場で活躍している方もみられました。

2. 活動者相互の思いやり

例えば、若年層への向き合い方。若年層が地域で活動をおこなう際、ベテラン勢にとっては理解しづらい取組みを発案することがあります。そのとき「良かれ」と思って叩くより、見守り支えるという姿勢がその成長を促すことがあります。ベテランだからこそ発揮できる見守る力、フォロー力、これが活きてくるのです。またベテラン勢と関係を築き、ともに

活動をおこなう若年層の中には、先輩方の企画力や経験の蓄積に尊敬の意を抱いている人が多いです。活動をすすめる中で、「誰もが」気兼ねなく声を出し、声を聞くことができる工夫をされている地域もありました。さらには、仲間の力を信じ、感謝することで活動者間のつながりを良好な形で昇華させている実践もありました。

3. 在勤・在学者への配慮

在勤・在学者の中には、地域に住んではいなくても地域に対する想いや愛着を抱いている方はたくさんいます。そのような方が地域とつながれる工夫、在勤者・在学者が踏み出した一歩や、その勇気を汲み取る工夫が活動者間で共有されれば、参加・参画の幅はグッと広がります。

4. 世代及び活動者を「つなぐ」役割の重要性

若年層の地域活動において最も心強いのは同世代の仲間の存在です。同世代の仲間がいることは参加・参画のハードルを大きく下げます。同時に、柔軟で持続可能な支えあいのまちづくりをすすめるには、多様な人材、生活様式に基づく発想、価値観が求められます。多彩な人材が参加する活動は、いわばバラエティに富んだ力の集合体です。幅広い年齢層が持つ世代特有の発想や知識、多彩な経験や職業に基づくスキルや特技。それらをつなぎ紡ぎ、ときにクッションとなりながら、相互理解と協働へと結び付けていく「つなぐ役割」の存在は、活動を魅力的なものへと展開させ、多くの方の参加・参画を促し得るのです。



甲南女子大学 人間科学部
すずき だいすけ
准教授 鈴木大介 さん

主な研究テーマは、コミュニティワーク、地域福祉計画、小地域福祉活動。市内の複数区・地域において「地域福祉計画」や「見守り活動」などに関する研修講師・アドバイザーなどを務める。



日本地域福祉学会の会場となった東北福祉大学

世代をつなぐ 連動企画レポート

インタビュー連載だけじゃない！

大阪市社協では、新たな参加・担い手育成に向けて研究活動や、活動者の声を直接発信する企画にも取り組んでいます。

地域活動の参加・継続要因を全国学会で報告

——日本地域福祉学会第29回大会 [平成27年6月21日]

東北福祉大学(宮城県仙台市)で開催された学会の自由研究発表にて、地域活動への参加・参画要因、継続要因について、活動者インタビューを分析した結果を報告しました。(共同研究者:大阪市社協 田淵章大(発表者)、城東区社協 青木智香、甲南女子大学 鈴木大介/敬称略)

分析の結果、参加・参画を促す要因としては、活動への興味(=関心要因)と、誘われるなどのきっかけ(=機会要因)が目立ち、両者の関連性が見られました。また、地域活動を継続する中で「創意工夫」できて「やりがい」があること、それらを実現する「地域の度量」が、活動への主体性を高める要因として明らかになりました。

発表後、フロアからは「若手活動者の声を記録した貴重な研究。活動を始めたときの“関心”がその後どう変化していくかにも着目してはどうか」とコメントが寄せられました。



▲会場では第一弾の冊子も配付して報告された

区を越えて語りあう 若手の参加をすすめる工夫

——西淀川区地域福祉活動連絡会 [平成27年7月9日]

西淀川区で隔月開催されている地域福祉活動連絡会にて、担い手育成を考える企画として、港区築港地域の阪上眞奈美さん(前回冊子に掲載)をゲストに迎えて実践報告・情報交換がおこなわれました。

阪上さんは、若い人が参加しやすいように「子ども連れでいいから」「長続きしなくてもいいよ」とお誘いすることや、地域のイメージソングをつくるなど、活動を楽しむ姿勢の大切さを発表。

一方、西淀川区のみなさんからも「うちの地域では若いお母さんにふれあい喫茶でボランティアしてもらい、小さい子は私たちが別室で面倒を見ている」といった若手が入りやすい工夫を報告。区を越えて、互いに刺激やヒントを持ち帰る機会となりました。



▲活動の楽しさと工夫を語る阪上さん(左)と西淀川区社協の西川さん(右)

「敷居を低く!」シンポジウムで発信

——地域福祉シンポジウム [平成28年1月23日]

大阪市社協が主催した「地域福祉シンポジウム」に、若手活動者の立場から、住之江区太陽地域の奥田修司さんと小川宗治さん(前回冊子に掲載)が登壇。

こども会を復活させた経緯から「担い手獲得のパーベキュー大会」などのユニークな取り組みを紹介し、「敷居を低く(1時間手伝って!)」「ひとつ卒業すると次の活動へと進む流れを地域でつくりたい」と、活動に循環をもたらすキーワードを紹介しました。

終了後のアンケートでは「若い人が入っていけるような工夫を聞けてよかった」「“バトンをつなぎ任せる”という言葉が印象に残った」といった声も寄せられました。



▲参加や担い手を広げる視点を投げかけた奥田さん(左)と小川さん(右)



社協ワーカーの視点

今回、取材に同席した区社協職員に、区内でともに活動しているインタビュー対象者への思いや、新たな参加・担い手育成についての考えなどをうかがいました。

あわせて、企画・取材を担当した市社協職員のコメントも掲載しています。

■城東区社協 井西弘宣さん

(庄司さんの取材に同席)

「世代をつなぐ」…庄司さんは、地域にとってまさにそういったリーダーであるとあらためて感じました。リーダーを務めるアクションプランで課題に取り組む姿に区社協ワーカーとして、今後も支援していきたいです。活動のきっかけは人それぞれ。小さな喜びや楽しみ、そして温もりや暖かみを感じたときに主体性が生まれ、新たな輪ができるのではないのでしょうか。



■平野区社協 阪井誠一さん

(室川さんの取材に同席)

室川さんはスポーツがきっかけでしたが、地域活動に関わるきっかけ(入口)はたくさんあったほうがいい。住民一人ひとりが地域の将来について夢を語りあい、できる範囲の中で地域活動に関わりを持てる環境をつくる。このことが、新たな活動者の参画、さらには社協がめざす「多様性を認め合い、つながり支えあえる地域づくり」につながっていくのではないのでしょうか。



■東住吉区社協 佐々木雅子さん

(石野さん・山藤さんの取材に同席)

見守りネットワーク構築プロジェクトの継続実施によって、徐々に高齢者と電気屋さんが顔見知りになり、何かあったときの連絡先のひとつになってきています。今回のインタビューのキーワードとなった「知り合う」ということ。今後もその機会をつくり、カタチを変えながら、仲間を増やしながら、活動していきたいと思っています。



■東住吉区社協 廣瀬大記さん

(石野さん・山藤さんの取材に同席)

石野さんと山藤さんのお話を聞いて、2人の地域を大切にすることが伝わってきました。見守りネットワークを、より地域に根付いた活動にしていくとともに、石野さん・山藤さんのような活動者を地域活動に巻き込んでいける仕組みをつくっていききたいと思います。



■都島区社協 宇都宮葉子さん

(鳥屋さんの取材に同席)

「ありのままで」「自分らしく」——よく耳にする言葉ですが、あまりにも漠然としていて、私は今までよくわかりませんでした。それが、鳥屋さんをはじめとする「ある」のみなさんとともに過ごすうちに「自分らしく」ということは「基本的人権の尊重」そのものだと感じるようになりました。それは、福祉の根底にあるものだと感じています。



■西淀川区社協 佐藤茂忠さん

(福田さんの取材に同席)

子育て支援活動を中心に、行政や地域などさまざまな方とのパイプ役である福田さん。「お願い上手」と答えられています。福田さんのように、住民でありながら地域組織だけでなく、社会貢献として活躍されている方・したいと思っている方などの関係づくりも大切に、社協がうまくつなげる役割を担っていききたいと思います。



■西淀川区社協

にし かわ ひろ こ
西 川 博 子 さん

(福田さんの取材に同席)

「みんなが笑顔で楽しそうにしているところを見るのが好き」と語っておられるとおり、福田さんの周りは笑顔があふれて、自身も楽しんで活動しておられることが伝わってきます。柔軟な発想力の持ち主であり、そして何より頼りになる!なので自然に人が集まる!これからも世代をつなぐステキな活動の展開を期待しています。



■阿倍野区社協

いわ もと のり こ
岩 本 典 子 さん

(竹田さんの取材に同席)

竹田さんのきっかけは“海外から見た日本”。どんな社会にしたいのかを考える中で「一人ひとりが声を出しやすい地域づくりを」との思いを抱き、「同世代」と「地域」の思いをつなげる架け橋のような存在になっています。単に地域活動の担い手ということだけではなく、個人が活動を通じて「しあわせ」だと思う地域づくりと一緒に歩んでいきたいですね。



■東淀川区社協

にし いけ み ね
西 池 深 音 さん

(小笠原さんの取材に同席)

「とても行動力のある人だな!」というのが小笠原さんと初めて会った印象でした。インタビューで話されていた「人とのつながりが楽しい」「人に喜んでほしい」という思いこそが、ボランティアや地域活動の原動力となるもの!区ポラセンの運営委員にもなられて、その「熱い思い」と「行動力」で、さらなるご活躍を期待しています。



■大阪市社協

ぬま た おさむ
沼 田 修 さん

(庄司さん、室川さん、石野さん・山藤さん、鳥屋さん、福田さんの取材を担当)

この取材は私たち市社協職員にとって、大変魅力的で楽しい企画です。活動者のみなさんは、ときに難しい問題や一筋縄でいかない壁にぶち当たっても、活動に「楽しみ」を見出し、悩みながらも前に進まれているのが印象的でした。これからもたくさんの方と出会い、大きな意味でのつながり・出会いの場を創っていききたいと思います。



■大阪市社協

た ぶち あき ひろ
田 淵 章 大 さん

(全7件の取材を担当)

活動者ならではの名言、導かれたヒント…この積み重ねから、実際、地域で何をどうすれば「地域活動ってええやん」という住民を1人、2人と広げていけるのか。また、多様な参加のカタチ、楽しい活動から“福祉のまなざし”を育むために大切なことは——そんな視点から、区・地域のみなさんと次の一手を探っていきたいです。



■大阪市社協

あき た だい すけ
秋 田 大 輔 さん

(竹田さん、小笠原さんの取材を担当)

「地域活動はお金に変えることのできない財産を自分にもたらししてくれるもの」。竹田さんと小笠原さんの取材から感じたことで、双方とも共通して地域活動は人との出会いが魅力だと口にしていました。そんな魅力を体感されたお二人のような若い人たちが、地域活動と次世代の活動者をつないでいくのだらうと思いました。



地域活動の魅力を伝える情報誌 「世代をつなぐ地域活動者に聞く」Vol.2

平成28年3月

編集・発行: 社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会

〒543-0021 大阪市天王寺区東高津町12-10

TEL.06-6765-5606 FAX.06-6765-5607

ホームページ <http://www.osaka-sishakyo.jp/>

メールアドレス fukusi@osaka-sishakyo.jp

ご意見・ご感想を募集します!

本冊子をお読みいただき、ありがとうございます。
今後の取組みの参考として、ご意見・ご感想などをメール・FAXで左記までお寄せいただければ幸いです。
(いただいたご意見・ご感想は、個人が特定されない形で、本会の広報媒体にてご紹介をさせていただく場合があります)

※本冊子に掲載のインタビュー対象者のプロフィール・年齢などは、各ページに記載の取材日時点を基本としています。

※社会福祉協議会職員の所属については平成28年3月時点となっています。

発信

あなたのそばの福祉のとりくみ

あなたの身近にある“福祉のとりくみ”を楽しく、分かりやすく、市社協スタッフの目線でお伝えするブログを日々、更新しています。

市内24区の社協活動・地域福祉活動の最前線に迫る!ココでしか得られない、読んでトクする情報満載ブログをぜひ一度お読みください。

こんな風に活用できます!

- 活動者の思いが分かるので、実際に活動に参加してみたい方にとっての参考材料に!
- すでに活動している方にとっては、自分の活動をより良くしていくヒントがたくさん!
- さまざまな記事を読んでいくと、市域における地域福祉の流れが分かる!

市社協ホームページで地域情報を
随時発信中!

【区社協活動レポート】淀川区社協 コミュニケーション麻雀活用説明会を開催しました!

2016/02/15

去る12月18日(金)、淀川区在宅サービスセンターを会場に「コミュニケーション麻雀活用説明会」が開催され、その場に市社協もお邪魔しました。



コミュニケーション麻雀は全国各地の社会福祉協議会を中心に広がっている取り組みで、その特徴は大きく挙げて2つ。1つは2～4人が1組となり、そのなかで相談しあったり、会話を楽しみながら4組が向かい合って麻雀をうつということ。もう1つは使用する牌(ばい)が通常よりも3～4倍も大きいということ。1つおおよそ240gで、過度な重さが介護予防にもつながるとされています。

このコミュニケーション麻雀の普及に各地を奔走しているのが田川雅規さん。2010(平成22)年にコミュニケーション麻雀協会を立ちあげ、代表理事を務めています。



元々は「施設を引退した男性がどうすれば地域に出てこれるか」という相談を受けたことがきっかけとなったそうです。田川さんは麻雀をほとんどしたことがなかったのですが、男性が楽しめるアイテムの1つに麻雀が思い浮かび、大きい牌を試したことから始まったとのこと。

説明会ではこの大きい牌に慣れるために二人一組になって積み木くずしをするところからスタート。互いに声をかけ合っているとゲームが進まないで、自然とコミュニケーションが図れるようになっていきます。そうして牌を使って様々なゲームを楽しみ、実際に麻雀も楽しんだ参加者からは概ね好評の声が多く、終始笑顔のままだ説明会は終了。



どう活用するかはあなた次第!

大阪市社会福祉協議会は、つながり・支えあいの地域福祉活動を支援しています

私たちのめざす地域

つながり・支えあうことができる 福祉コミュニティ

私たちは、身近な地域の中で、一人ひとりの生活の困りごとや生活のしづらさに関心を持って、住民同士が話し合い、新たな担い手の参加・協働を積極的にすすめることにより、互いにつながり・支えあうことができる地域をめざします。

「地域福祉活動をすすめるための大切な視点」は、市社協のホームページからもご覧いただけます。

(トップページ ▶ いろいろ知りたい ▶ 調査研究・報告書コーナー内)



「地域福祉活動をすすめるための大切な視点」

大阪市社協

検索